



リレートーク #183



ゴスペル・ナイト

村本 豊彦

プラスト
取締役社長

休日の夕食は妻や家族でゴスペル・ミュージックを演奏している店を探してよく行く。場所によっては聖書の学びができて、30年前にプロテスタントの洗礼を受け最近はずっかり教会から遠のいてしまっている自分自身には耳が痛い場面もある。奥さん孝行、家族親睦という側面もあるが、若いスタッフやミュージシャンと触れ合うことはとても新鮮だ。

ゴスペル（福音）の語源は、God Spell → Good Spell といわれている。17世紀に奴隷としてアメリカ大陸へ連行されたアフリカ人は言語、信仰の自由を剥奪された。彼らは救いを与える福音と出会い、キリスト教へ回心し神に独自の賛美をささげるようになった。

その後、ヨーロッパの賛美歌やアフリカ特有のリズムなどと融合し、現在のゴスペルの基調となる音楽が誕生し、今も進化している。その軌跡の中ではレイ・チャールズ、サム・クック、ジェームス・ブラウンなどがゴスペルとR&Bを融合させ、ソウル・ミュージックという新しいジャンルを築いたが、当時の教会からは俗っぽいと反発を受けた歴史もある。

しかし近年は信者獲得のため、多くの教会で公認され、映画「天使にラブ・ソングを…」や広く歌われているAmazing Graceなどのヒットで一般でもゴスペルを身近に感じることができるようになった。機会があって、米国のゴスペル・シンガーやクワイア（聖歌隊）のコンサートに行き、彼らの歌に触れたときなどは、音楽性の高さはもとよりその誕生した背景に思いを巡らせ、心の底から感動を覚える。

普段は仕事と称し家庭サービスを怠けて、休日にはゴルフばかり行っている。そんな生活の中、こうして家族で出掛け、若い仲間たちと食事や音楽を楽しみながら過ごせる場所があることは、私に明日への活力を与えてくれると感じている。

次回リレートーク：青木 巖（キャピタル・アドバイザー 取締役社長）